



NPO/  
**SORUCA**  
NonProfit Organization/Soft Resources of Urban and Country Association

通信

秋  
2023

会員 各位殿

令和5年11月30日

NPOソフトインダストリー研究会

巻頭言

理事長 奥原 英彦

## 教科書レス時代の大学

古くはギリシャに源流を持つ「学問探求の仲間(組織)」である「大学」は、「高度で多様な知識・知恵・教養が交流」する「ソフトな社会装置」と見ることが出来ます。わが国において、その大学が、今「大変革」の時代を迎えています。

まず、「少子化」による「定員割れ」現象が顕在化。「ブランド力(人気)」のない大学は、「統廃合」を余儀なくされています。これは、日本では大学が「ソフト産業」であり、個別ブランド経営力の上に立脚する組織(学校法人)であるからです。現在の「定員割れ」事態は、1970年代からの人口ピラミッドを見れば、一目瞭然。つまり、ブランド力に磨きをかける努力を怠ってきた大学は、少子化の進展とともに市場から消えることとなります。

ここで注意すべき点は、最近の「ブランド(人気)」校は、「高偏差値」校とは限らなくなってきたことです。その背景が、次のAI発展による「暗記型知識偏重」教育との決別です。

今のAI(人工知能)は、「自動運転」「将棋ソフト」に見られるように、膨大な情報とエビデンスのデータベース(二次情報)から、「深層学習」に基づいて「想定内の」最適解(コンテンツ)を推論していくものです。

つまり、AI時代には、「定型的(左脳的)な」知識の「暗記型学習」は機械(道具)にまかせ、人間はAIでは出来ない「非定型(右脳的)な」「創造力・交渉力・抽象化力」などの「探求型学問の場」が、「大学」に求められることとなります。

むしろ、この「(知識)暗記型」から「探求型」への変革は、「大学」だけでなく幼児教育から小中高教育までの「教育産業」全体に求められると言っても過言ではありません。

当然のことながら、(共通)テストの点数の多寡ではなく、面談などで把握される探求力評価の多寡で、入学の合否が決まることになり、「偏差値」によって歪められた大学や教育産業の「ブランド」も正常化すると考えられます。

大学が変われば、戦後、GHQによって導入された「学習指導要領」や小中高から教科書が消える(教科書レス)時代が近いかもしれません。

(奥原英彦)

## SORUCA 通信 contents

- 巻頭言 教科書レス時代の大学
- 少子化時代の大学PR
- 大学について
- 生成AI時代の大学教育
- 編集後記

- / 奥原 英彦
- / 菊池 泰功
- / 白石 嘉宏
- / 島川 崇
- / 奥原 英彦



## ○大学広報PRの支援に向けて

PRクエスト株式会社を2009年9月に起業し、最初のユーザが大学でした。以来、業務委託により大学の広報アドバイザー職を担当し、創立以来14年間で計4大学の広報アドバイザーを担当してきました。私は元々、IT企業の社員として計15年ほど広報業務に関わってきました。その経験を活かして、一人起業により広報活動の支援業務を始めました。大学卒業後、社会人になり大学という世界には、殆んど縁がありませんでした。今では、業務の大半を広報アドバイザーという立場で、大学のトップをはじめ広報関係の教職員の方々と共に大学広報の活動をしています。私が大学広報のサポートを始めた頃に比べて、この数年、大学における広報活動の役割が高まってきたと肌で感じます。

## ○最近の大学広報とトピックス

2020年春に新型コロナウイルスの感染が拡大して、大学ではオンライン授業の採用が進み、学生は自宅等からオンラインで授業に参加する生活になりました。学生の募集活動においても、一番中心だったオープンキャンパスも対面で開催することができず、オンラインでの開催になりました。これは、大学の広報活動に大きな影響をもたらしました。また本年3月には、恵泉女子大学の学生募集の停止が大きく報道されました。これは教育関係者だけでなく、一般の社会人からも注目を集めるニュースとなり、少子化の影響を強く感じました。

## ○今こそ大学には、広報活動が重要

大学の経営において、学生の確保は大きな影響を与えるため、特に私立大学においては入学生の確保が経営上の大きな課題です。学生募集に苦戦する大学の状況を見ると、入試広報に偏重していることが多く、大学および法人の広報活動を軽視している傾向があります。学生募集のための入試広報は必須として担当部署や職員を置いて、大学の認知度やブランド力の向上のための広報活動には、担当者不在、または兼任で片手間になっているケースが見受けられます。大学では、目の前の受験生集めを優先して入試広報は実施しても、すぐに効果が見え難い。大学広報のためのリソースが後回しになりがちです。そして今、18歳人口の減少による全入時代において、国内の大学の半数以上が定員割れとなる状態になり、大学の本来の教育・研究、社会貢献をはじめとした大学の活動を効果的に学外に発信して、社会的評価を高めるための広報PR活動の重要となってきました。

## ○大学広報の強化に向けて

私が大学の広報サポートを始める際に感じたことは、大学という組織は内向き、縦割り、前例主義という体質を感じました。サラリーマン時代の経験からすると対照的な面のある世界での対応に戸惑うことがありました。

そして、大学広報の強化を担当するにあたり考えたのは、大学の社会的評価が高まれば学生は自ずから集まるはず。とういことでした。当時、プレス対応などの広報活動をしている大学は、国立大と一部の有名総合大学ぐらいで、全体的の2-3割程度と少ない状態でした。一般的な私立大学は広報専門の部署がなく、担当者不在で広報経験者がいないために、入試広報の延長で広告・宣伝をすることが広報活動だと思っている大学があります。

私は広報アドバイザーとして、大学広報の強化を支援するにあたり、自身の民間企業時代の経験を活かして、あえて企業と同様の手法で大学広報を強化することを自身のサポート方針にしました。大学の社会的評価が高まれば、選ばれる大学となり、志願者が集まるはず。という仮説において、活動を進めました。そして大学の特色を魅力的に伝えて、ブランド力を向上することが有効となると信じていきました。そこで、メディアを効果的に活用し、話題となり社会の注目度を高めるこ

とを目指しました。そのためには、主要なメディアでのニュース掲載を増やすこと必要であり、合わせてネットで検索上位表示を実現することを狙います。実はこの点に気づいている大学の広報関係者は少ないのではないのでしょうか。

具体的なサポートとしては、大学の看板／顔を創り、「〇〇〇の〇〇大学」という認知と評価を得ていくこと目指しました。自学の強みを継続的かつ効果的にPRするが大切であり、メディアでニュースとして紹介されることにより、ネット上で話題になることが必要です。

広報活動の実務レベルの業務支援では、

①質の高い(ニュースになる)プレスリリースの作成と発信。

②学内のニュース価値の発掘と発信、

③信頼関係を築くコミュニケーション、を重視しました。

その結果として、1)メディア掲載の増加、2)ネットの検索上位表示の実現を目指しました。特に従来、プレス対応を実施していなかった大学に対しては、①プレスリリース、②取材、そして③記者会見。またそのための基礎となるメディアリレーションの構築。という基本的な広報活動を大学は主体的に実施できるように、共創的なサポートを提供しています。

このような地道な基本的な広報活動の継続と積み重ねは時間を要しますが、遠回りでも間違いなく少しずつ成果が出てきて、大学に対する社会の目や評価が高まってくる手応えを感じています。

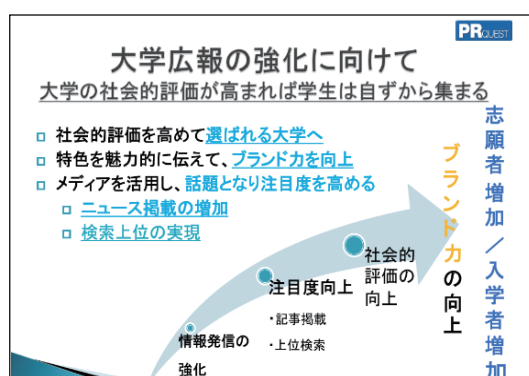
これまで私は、理工系私大をはじめ、複数の大学で広報アドバイザーを担当していきましたが、不思議と同様に共通した広報課題を抱えており、その解決策は同様のものとなりました。大学でも企業でも広報活動においては、そのポイントや有効性は変わらないことが証明できました。

少子化が進行する中、大学の広報活動は目先の受験生を集める入試広報よりも、大学の本来の特色を魅力的に社会に伝えていくための広報活動が重要です。効果的な広報活動により、社会とコミュニケーションしていくことが有効であることを、大学の広報関係者に理解してほしいものです。

## ○サポート事例

現在、広報アドバイザーを担当している事例として、埼玉工業大学を紹介します。埼玉県北部の深谷市にキャンパスがある1学年500人の小規模な大学です。6年前から生き残りを掛けた戦略的な広報強化支援を実施してきました。大学の顔を創るために、「自動運転」の研究を広報テーマとして注力してサポートしています。

<写真:深谷自動運転実装コンソーシアムの共同記者会見>



自動運転をテーマに、プレスリリースを年間約10件発信し、そして取材も年間約20件、記者発表会や見学会を計10件近く実施してきました。その結果、年間100件近い記事が各種メディアで掲載されるようになりました。それにより自動運転の研究に積極的な大学としてメディアから評価され、大学の認知度を高めるような記事の紹介が大幅に増えました。そして、志願者もこの数年で最大5割近く増えました。

私はようようTFNDの時代に向かうところに来たと嬉しく思っています。時代と変化に対する先見性と対応能力が今まで以上に求められるようになりました。

さて、今回は奥原理事長より大学について思うところを述べて欲しいとのことですので、私の私見を。では初めに、どういう人が以下のことを述べているかによりその人の視点とそこからの見解が出てきますので、まずは簡単に自己紹介をします。

私は高校は理系でした。数学の授業では教室の机の並びは成績順でした。3年生になると学校の授業とは別に実力試験と言うものが学期ごと全部で3回ありました。このテストの結果は1番からビリまで廊下に張り出されます。誰がどういう成績かは一目瞭然。そうして大学に進みます、私学で小学校から大学まで続いていますから所謂トコロテンですが、この実力試験の成績結果により希望の学部学科に行けるかどうかまします。理系は授業に加えて実験などがありキツイと聞いていたので経済学科にしました。

一二年生の授業は一般教養科目が主体です。高校で習ったことよりもっと簡単な内容でした。語学と体操以外は出席を取られません。だからそれ以外の一般教養は出ませんでした。当然昼間の時間が空きます。

私は海外に出ようということを目的とした20校の集まりに入りました。当時は外貨が乏しく政府の許可が無ければ海外には出られません。初めに政府に建白書を出し50万円、経団連から50万、日商から15万、青年会議所から5万円と150万円集め16人で1961年ブラジルとアルゼンチンへ船で。

院長の安倍能成氏から学生は学問をすること。至急帰国せよとの手紙をシンガポールで受け取りました。帰国後院長に挨拶に行きましたが4年間は大学に居なさい。とのお達しです。文系は楽なので帰国2年で必要に十二分な単位を修め、再び院長に交渉しましたが4年居なさい。は変わりません。仕方が無いので4年の時は美術史、哲学、変体仮名など経済とは何の関係もない科目を選び時間をつぶしていました。

1980年代の中ごろから団塊第二世代の大学進学を受け入れるため多くの大学が生徒を増やすのですが、文科省のお達しで郊外に設けなければならないことになりました。

この時期どの大学でも文科省が認める大学教授の手当が出来ず、大学教授同等の能力があると認められる人を臨時講師として迎えることで凌ぐこととなり、私は2つの大学の臨時講師を務めました。契約は4年。契約完了前に教授として招聘というありがたいオファーをもらいましたが。毎年同じような内容の話をするのはつらいので2校とも辞退しました。以上が私と大学の関わりです。

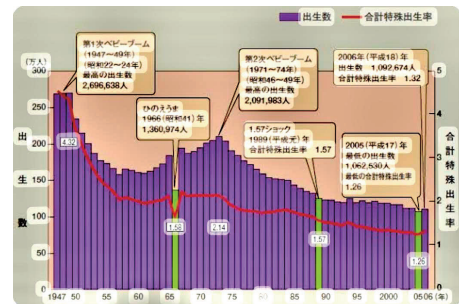
今はどうか知りませんが当時は大学で教鞭を執る人10万人。そのうち書籍出版・テレビなどメディア対応3千人と言われていました。ですからほとんどの教職者は学校の中から外に出ていないのです。一方で、学生はと言うと大学に行くのは就職のためでしょう。卒業後に備えて資格を取ろうとする学生は一握りでしょう。

時代変化。

### 初めに需要と供給。

少子高齢化が顕在化してきました。少子化は学校への入学希望者が毎年減って行きます。生徒から授業料を納めてもらうということが主な収入源としている大学は減少しないように入學試験のハードルを下げ続け、加えて規模の縮小を図るのでしょう。子供たちは入学が楽になる。人手不足だから就職が楽になって行くでしょう。

一部の名の知れた大学はともかく、多くの大学では経営維持・質の低下のための劣化は避けられないでしょう。淘汰が始まります。



### 世界の中で。初めに人口動態

世界の人口分布とそれに伴い経済関係の変化が顕在化し始めています。G7に対してグローバルセブンの存在が大きくなってきていますが、グローバルセブンの人口は全地球人口の四分の三に達しています。G7の国々の平均年齢と比べると半分ぐらいですから、これからのモノ消費経済はグローバルセブンに移ります。

### IT時代。

誰でもが世界とのアクセスが可能になりました。ここでの言語は英語です。AIにより音声も含め自動翻訳が当たり前になりますが、そのワンクッションを置かないで対応できる方が有利でしょう。教える側でこの変化に対応できる人材、数と質両面から。



### 都市と地方。

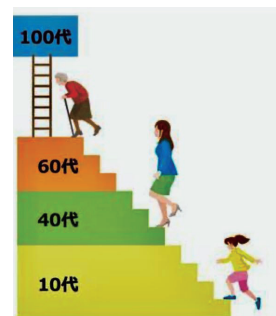
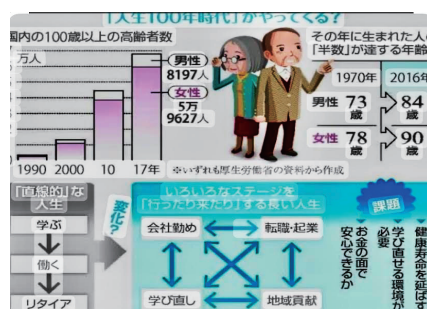
人口動態は核家族、独居暮らし、都市と地方というそれぞれが抱える問題、これに対する対応は不足しています。この方面に対する役割も期待されます。

¥

### 結論。人生100年時代。

如何に楽しい一生を送るか。大学にはその提供が求められます。サザエさんの時代は50歳から55才歳が定年、寿命も60歳代。それが今では定年65歳、寿命は100歳が視野に入ってきました。所謂リカレント教育が本格的に必要になります、此処では経済社会対応の教育と、もう一つは、綺麗・健康・趣味・社会参加それらを可能にする・支援する教育が必要です。大学はこの分野に果たす役割を担わないと。

終わりに;好きなコトには邁進できます。好きなことを見つけられるようその手助けも担って欲しい。徹夜マージャンでは死にませんがツライ残業では死にますから。



# 生成AI時代の大学改革

島川 崇

この1年を振り返ってみると、ChatGPTをはじめとする生成AIの技術発展と市民生活への定着は目覚ましいものがあった。教育界でも生成AIはもう避けては通れないところに来ている。

大学においては、全面禁止する大学もあれば、指導教員の方針に委ねる大学、学生個人にその判断を委ねる大学、一部使用は認めるものの、課題に使用する場合には自らの言葉で書かなければならないとしている大学、有料ライセンスを共有することで積極的に利用を促進する大学と、生成AIに対する対応は様々である。

教員側の反応をみると、大きく3つに分類することができる。1つ目は、生成AIの発展を脅威と捉え、強い警戒感を抱きながら対応に苦慮する教員、2つ目は、生成AIをたとえ使ったとしても、アウトプットに関しては淡々と変わらず指導する教員、3つ目は、生成AIの発展を全くものともしない教員である。大学の組織的対応は様々だが、教員の反応はほぼこの3つに収斂されている。この3つに分類することで、生成AI時代になすべき大学改革が見えてくるのではないか。

1つ目に該当するのは、語学教員が多い。確かに語学の授業では、オリジナルのものと言われても、我が家の中2の次女も、英作文の大量の宿題が課せられて帰ってきて、ちゃっかり使って、大量の課題をすいすいと解いている。語学の習得方法は以前と大きく変化してきた。かつては単語を覚えるために必死で何度も何度も書き写し、単語帳を作ってパラパラめくり、頭に叩き込んでいた。しかし、今ではそのような学習方法で覚えるよりも、アプリを用いて短時間で効率的に覚えられる。すなわち、語学教育に関して、大学の単位として集合して学ぶことの意味が問われている。

一方、私の関わる観光学においては、だいたい3つ目に該当する。観光をやっている人が楽天的な人が多いということは傍に置いておいたとしても、ホスピタリティを実践的に学ぶ場合は、生成AIは脅威にもならないし、参考にもならない。お客様に寄り添った最高のサービスとは何かを考えると、生成AIは登場しない。これは、職人芸がものをいう現場では同じ状況であろう。

ほとんどの伝統的学問を研究している人は、2つ目の分類だ。自分で論文を書くときに、引用するときは出所を明らかにするという当然のルールに則れば、生成AIは参考にしても事実かどうか不明な場合は一次情報を探するという行動をとることができるため、別に生成AIが脅威にはならない。教員側も、これは誰が明らかにした事実かと問えばいいだけである。そこで出所を明らかにできない場合は、書き直しを命じればよいだけである。

このように整理してみれば、生成AIの出現をものすごい脅威として捉えられているのは、語学教育に限られているということだ。それだけ戦後の我が国の大学に語学が大きな比重を占めているということである。推薦入試を除いて、一般入試においては、受験科目を減じることが志願者増に直結するため、私立大学ではここまですっと受験科目を減らす傾向が続いている。それでも、英語はどの学部学科でもほぼ必須である。理系でさえも、物理や数IIIはなくても英語は課せられる。教授会においても、語学教員は人数が多いため、語学教員の意見が通りやすい。

大学と十把一絡げにすると物事の本質を見誤る。大学の方向性がおかしくなっているのは、あまりにも旧態依然とした語学偏重が原因なのではないか。グローバル時代に対応するためと言え、語学の講義時間を増やすことに対して異議を唱えにくい。

最近の英語の試験は、長文がさらに長くなってきた。ただ、英語の文章が長くなればなるほど、点数を取るためには、その問題文が聞いていることが書いてある場所を高速で探す探知力に過ぎず、深い読解力ではない。だから、英語教育ばかり受けていると、真の読解力が身につかない。表層をなぞるスピードの向上だけである。

結局、暗記力や高速情報探索力に関しては、人間はAIに絶対に勝てない。むしろ、このような分野は積極的にAIを活用することにより、人間でなければできないことを強化していく必要がある。そして、人間の弱みを直視し、下手に悪あがきすることなく、弱みはAIに委ねてAIを活用することを考えていくべきである。AI全盛の時代に生き残るには、同じ土俵で勝負するのではなく、絶対に違う土俵で勝負するべきなのだ。人間の生き方が、AIに影響されて、知らず知らずのうちにそちら側に引きこまれていないだろうか。大学入学共通テストの改革をはじめとする最近の入試傾向が、考える力の涵養と言いながら、全員に課している英語において、深い読解力よりも高速情報探索力をさらに求める傾向にあることがそれを物語っている。このことから、もう大学で正課の授業として語学は必要ないのではないだろうか。必要に迫られたら自分でできる。語学学修アプリを学生に無償供与したので十分だ。それで空いた時間は、全て専門分野をさらに深化させることに回すべきだ。

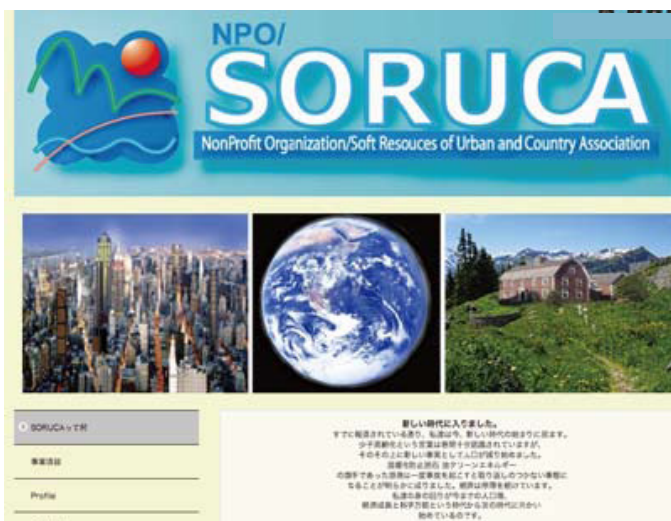
また、生成AIには、ユーモアや楽しさ、遊び心がびっくりするほどない。ChatGPTに面白いことを言ってくださいと入力しても、何度やっても全然面白くない。人を面白がらせるというのは、どうやらかなり高等テクのようなのだ。そして、言わずもがな、体温がないし、情熱もない。

私が今関わっている観光学は、確率・統計的に同傾向と予想された「あなたらしい人」ではなく、ユーモア、楽しさ、遊び心、寄り添う心で、目の前の「あなた」に迫ることができる。今まで、観光学なんて学問ではないと蔑まれてきた。こんなもの学んで何になるのかと馬鹿にされ続けてきた。偏差値の低い学問の象徴のように扱われてきた。しかし、案外生成AIがさらに発展していく中で、しぶとく生き残るのは、偏差値の高低とは関係ないところにありそうだ。偏差値の高い領域ほど、生成AIの脅威に怯えている。

今までは、ユーモア、楽しさ、遊び心、寄り添う心等は、属人的な領域であった。この領域に関して、教育を受けることで、志す者全てが能力を発揮できるようにするための教育方法を開発することが、私がここ数年以内を実現しておかなければいけないことだと確信し、残りの人生をそれに賭けてみたいと思っている。

<編集後記>

今回のSORUCA通信では、「少子化・AI時代」を迎え、変革しつつある最高学府の「大学」をテーマに編集してみました。落日の大学をPRでブランド校に変身させた実績を持つ菊池氏には、初めて寄稿をいただきました。また、大学教授を「辞退」された白石顧問、「現役の大学教授」である島川理事の各論も、それぞれ示唆に富んだ内容となっています。百年ぶりに暑かった11月も過ぎ、木枯らしや積雪の季節に入ってきました。風邪など引かぬよう暖かくしてお過ごし下さい。(奥原 英彦)



SORUCA のホームページの画面です。

<https://soruca.org/>



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」  
SORUCA 通信 (2023年 秋号 ) 広報誌

発行責任者 奥原 英彦

発行所 NPO ソフトインダストリー研究会  
東京都渋谷区南平台町13-4-509  
FAX: 03-3770-6038

<https://soruca.org/>

編集人 長谷川 毅

発行日 2023年11月30日



NPO/  
**SORUCA**  
NonProfit Organization/Soft Resources of Urban and Country Association

発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会